昭和の仮面ライダー達が東方のゆっくりと出会ったそうです［前編］

ミスターサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
昭和の仮面ライダー達が東方のゆっくりと出会ったそうです［前編］

【Ｎコード】
Ｎ８６０１Ｘ

【作者名】
ミスターサー

【あらすじ】
タイトル通り、これは昭和仮面ライダーと東方キャラのゆっくり達の話です

ゆっくり嫌いだー！
キャラ崩壊などあります、それでも良ければ見てください

「・・・で本郷、その生物(ナマモノ)は、なんなんだ？」

「おやっさん、これは・・・『ゆっくりぱちゅりー』らしいです」

「らしい？」

「正体不明の生き物なんですよ・・・」

「大丈夫か、それ？」

「世界の破壊者の知り合いが持って来た生き物だから多分」

「ダウト」

「あ、やっぱり」

場は、東京にあるとあるコーヒーショップ『ＣＯＬ』

そこに二人の男と生物が居た

一人は、この『ＣＯＬ』のマスター、立花・・・通称『おやっさん』と呼ばれた、やや歳をとっている五十後半の男

もう一人は二十代後半の若い男、通り名は『技の一号』、仮面ライダー一号こと本郷　猛だ

そしてカウンターに一匹？の『ゆっくり』と呼ばれた謎の生き物が居て寝ている

「まぁ、無害ですし・・・大丈夫ですよ」

「・・・なら良いが」

立花は、そう言って本郷にコーヒーを出した

「ありがとうございます」

と本郷が出されたコーヒーを飲むと店のドアが開かれ、一人の男が入ってきた

男は帽子を被っていて肩にはクーラーボックスを担いでいた

歳は本郷と同い年に見える

「なんだ、一文字か・・・どうした？」

「よくぞ聞いてくれたぞ本郷！

見ろよ！これ！奇跡の生物を発見した美人がくれたんだ！」

「「奇跡の生物？」」

本郷と立花は顔をお互いの顔を見た

「で、その奇跡の生物ってなんだ？」

恐る恐る聞く立花

「よく聞いてくれたぜ！これだ！」

「どうも、ゆっくりこーりんです」

一文字と呼ばれた男クーラーボックスから出したのは『ゆっくりこーりん』だった

ガシャーン

とコーヒーカップが落ちて割れた音が響いた

実は、この一文字　隼人という男は仮面ライダー二号で通り名は『力の二号』と呼ばれている

「い、い、一文字、誰からそれを？」

「それ？あぁ、こーりんか！
実は胡散臭い美人からもらってな！
なんか愛着が湧いたし」

立花は、やれやれ的な感じで手を額に当てて首を左右に振った

「あれ？本郷、お前ももらってたのか？」

「あぁ、ゆっくりぱちゅりーだ
とりあえず起きたが」

「ふぁああ～、おにいさん、おはよう」

「あぁ、おはよう」

「で、一文字・・・その胡散臭い美人は何処に居るんだ？

今すぐお前らの『ゆっくり』を返却するから」

「悪い、おやっさん！見失った！」

「・・・」

立花は肩を落とすと

「まぁ、おじいさん・・・じんせいは、やまあり、たにありです」

「こーりん、お前は良い奴だな」

こーりんが慰めてくれた

ちょっとだけ『ゆっくり』を見直した立花だった

東京にある墓地、仮面ライダーＶ３、通り名は『力と技のＶ３』、

風見　志朗が墓石の前でしゃがみ、手を合わせていた

墓石には風見の文字と名前が彫られていた

風見は、手を合わせるのを止めて地面に置いていた花を墓石の前に置いた

「父さん、母さん、雪子」

彼は目の前で殺された家族達を言う

「また・・・生き残ったよ、そっちに逝けそうもない
何故だろうな、戦ってる最中・・・何か使命に駆(か)られるんだ・・・」
彼は墓に眠っている家族達に語りかけたが返事が
「ぷちゅん」
・・・とても可愛いくしゃみで返事が帰って来た
「・・・くしゃみ?」
風見は墓石の裏を、そーっと見る
墓石の裏には、緑色の髪をして、向日葵の飾りを着ける麦わら帽子を被った何かと不思議な生き物が居た
「「・・・」」
お互いに顔を見て、呆然(ぼうぜん)としているが内心では慌てている
風見の場合だけご説明させていただく
(え、なんで変な生き物が?デストロンの新兵器か?
いや落ち着け、風見　志朗!ショッカーの生き残りかもしれん!
よし、ここは勇気を絞って聞いてみよう)
と思っていた
「おにいさん、ゆっくりできるひと?」
「!?あぁ・・・少しだけなら」

「ほんとう！おはなさんは、すき？」
「少しだけなら
妹は好きだったが」
「ゆっ！ほんとう！いもうとさんにあいたい！」
「妹は・・・死んだよ、殺された」
「ゆっ！？」
「・・・どうした、顔をうつむいて」
「おにいさん、ごめんなさい」
「気にしてないよ」
「・・・おにいさん、ひとりぼっち？」
「一人か・・・孤独は無いかな？お前は？」
「ゆぅ・・・私は・・・」
「そうか・・・なぁ、ウチに来るか？」
「ゆ？」
「まぁ、恩師の家だが、ここに居るよりはマシなハズだ

どうだ？一緒に来るか？」

「ゆっ！いく！いくよ！」

「そうか・・・あ、そうだ
名前、聞いてなかったな・・・名前は？」

「ゆっくりゆうか！」

「ゆうかか・・・なら風見の姓をあげよう
お前は、これから風見ゆうかだ」

「ゆっくりわかったよ！」

「そうか」

（母さん、父さん、雪子・・・まだまだ、そちらに逝けません
自分に小さな家族が出来ました・・・）

風見は後ろについてくる風見ゆうかを笑って見た

［ジョージ！なんかスゴいの貰った！］

「え、スゴいの？」

場はタチヒという外国の島、そこで休養を取っていた結城　丈二・・
・仮面ライダー四号、『ライダーマン』が居た

ライダーマンには通り名は無い、があえて言うなら『償いの仮面の戦士』と言った方が良いのか
これは読者が考えていただきたい

［うん！川で見つけたの！日本でいう、お菓子でお饅頭のがあるでしょ！］

［うん、有るよ
けどヒナウ、どうしたんだい？］

結城は、笑顔で十代後半の女の子に外国語で話をする

ヒナウ、結城がとある事情でタチヒ島に流れ着き、出会った娘（こ）だ

ヒナウは両親が死に、祖父に預けられていた

会った結城を父のように慕（した）っている

［え～っとね！今、お饅頭は洗面所に居るから来てね］

［洗面所にお饅頭？］

よく解らんと首を傾（かし）げて洗面所に向かった

「ゆっくりしていってね！」

「・・・」

結城が見たのはコップの水を飲む変な生物だった

［ね、お饅頭があるでしょ！
ジョージ？ジョージ？」

「いやいや、まてまてまて・・・え？
饅頭が水を飲んでるのに溶けてないのは何故だ？
いや、それ以前に饅頭が喋った？科学的に有り得ん・・・
未知の生物？非科学的な物？いやいや、それを検証するには
いや貴重な――」

［ジョージが壊れたぁああ！！］

「けーねはわかったよ、このおにいさんは、ゆっくりできないひと
だぁああ！」

ちなみに結城が会ったのは『ゆっくりけーね』である

「あ～、なんだ・・・日本に帰ってきたらＧＯＴの残党が建設した
秘密を壊滅させたのは良いが」

「ゆっくりしていってね！」

「奇妙な生物（なまもの）が」

「ゆっくりしていってね！」

「・・・」

男の名は神　敬介
仮面ライダー五号『Xライダー』で通り名は『銀の仮面戦士』である
彼は緑の帽子を被り、髪が青い生物を見た

「なぁ・・・水の中が平気なのか」

その生物は水槽の中で敬介を見ていた

「うん、だいじょーぶだよ！
わたしは、おみずさんにつよいんだよ」

「へー、スゴいな」

「すごいでしょ！」

えっへん、とした顔で敬介を見る生物

（さて、どうしようか？
基地は壊滅させたから、この生物は孤独になってしまった
原因は俺だ、なら）

「なぁ、ウチに来るか？」

「ゆっ？」

「いや、この基地・・・君のお家は、もう壊れるんだ
だからウチに来るか？」

「おいえさんがこわれちゃうの？
そんなのやだよ！」

「けど壊れるんだ」

「ゆぅ・・・わかった、いく」

「よろしく、えーと」

「ゆっくりにとりだよ！にとりって呼んで」

「あ、あぁ」

これが敬介とにとりの出会いだった

「ウマウマ」

「うまうまー♪」

「ウマイか？」

「おいしい～なのだ～」

「ソウカ、オレ、ウレシい！コレも、タベロ！」

「おにいさん、やさしいな～」

「ガウ、オニイサンじゃない、オレ、アマゾン」

「アマゾンおにいさん、やさしいぞ～」

「ソーナノカ」

「あ、るーみあのせりふが」

場はサバンナ
ここに焚き火をして動物達に囲まれた男が居た
日本人、仮面ライダー六号『仮面ライダーアマゾン』ことアマゾン、
本名は山元　大輔だ
仮面ライダー達の間では『野生児ライダー』と呼ばれている
彼は孤児である
そして彼は昭和ライダーの中では天然なタイプだ

しかし彼は天然だがバカではない、大自然の中で生きていた一人の
老人に薬草とか保存食の作り方など教えてもらった

仮面ライダーの中ではサバイバル経験が長けているのだ

「ユカリも、食べルカ？コレ、食べロ
元気ガデル！ツヨク、ナレル！」
アマゾンは手に果物を持ち、何処にも何もない所に果物を差し出す
するとスーッと空間が開き、一人の女性が出てきた
彼女が、アマゾンが言っていたユカリだろう

「あら、ありがとうアマゾン」

「ガウ！」

「けど、よく分かったわね・・・気配を消したはずなんだけど」

「カン、と、匂い」

「あら、匂いで分かったの？」

「ガウ、なんて、イウカ？ユカリ、がイウ・・・ショウなんとか？」

「あら、覚えてくれたの」

「ガウ」

そんな会話をガツガツと果物を食うるーみあの効果音を聞きながら会話をする

そしてユカリと言う女性は空間の中に帰る時、アマゾンに呼び止められた

「アマゾン、ユカリの、トモダチ！！
ヨウカイとかワカラナイけどトモダチ！るーみあも！」

アマゾンは手で、ある形を作り、ユカリに見せた
アマゾン流の友達という合図を贈る

「当たり前よ、トモダチだからね」

「ガウ！」

そしてユカリは空間を閉じた

そしてアマゾンはニコニコして、ゆっくりるーみあと言う人？と一

緒に腹を膨らませる為に向かった

（後書き）

いかがでしたか？
後編は、まだ考えています・・・
ＺＸとＴＶ空白期ライダー達は、どんなゆっくりが良いのか教えてください

よろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8601x/

昭和の仮面ライダー達が東方のゆっくりと出会ったそうです［前編］

2011年10月23日20時24分発行